学校だより

生地っ子　７号

〔育てたい子供像〕

「かんがえる子」「はげましあう子」「ねばりづよい子」

黒部市立生地小学校

令和５年１０月３０日

～大人の私たちが子供にできること～

校長　　斉藤　康

あんなに暑かった日々も過ぎ、朝晩は寒さを感じる季節となりました。陽が落ちるのも早くなり、もうそろそろ冬支度を始める時期になりそうです。私は、タイヤ交換をしたりストーブを準備したりする合間に、時折、新しく移設された黒部市の図書館で本を借り、読書をしています。読んだ本の中で、名古屋大学大学院教授　速水敏彦氏の「他人を見下す若者たち」は子供との関わりに対して考えさせられる書籍でした。概要は以下の通りです。

【速水敏彦氏が気になる若者（子供も含めて）の現状】

人に対して簡単に「消えろ」や「死ね」等を言う若者が目に付く。また、自分の失敗を素直に認められない（「自分のせいじゃない」）。道を譲れない（道を数人で広がって歩行する）等、他の人への配慮に欠ける。自分の中でのルールが優先（「他の人もやっているじゃないいか」）。このような人をバカにした言動をとる若者が増えたのはなぜか。

【速水敏彦氏の仮説】

「過去の実績や経験に基づくことなく、他者の能力を低く見積もることに伴って生じる本物でない有能感」が強固になっているのではないか。「人をバカにした態度や行動をとることによって『自分は有能だ』という仮想的有能感が強化される。このような繰り返しの中で、仮想的有能感が一層強固なものになっていく」

【速水敏彦氏の主張】

「『仮想的有能感』が蔓延する未来社会がよいはずはない。われわれはこのような現実を把握して、足を引っ張り合うだけで協働できない社会がいかに効率が悪く、生産性に乏しいか、そして何よりもいかに心理的に潤いがなく、心理的に疲労するかをよく考えるべきである。」

【速水敏彦氏が考える対策】

①　「しつけの回復」
②　「自尊感情を強化する人のためになる経験」
③　「感情を交流できる場の設定」

子育ての参考になればと思い紹介させてもらいました。コロナ禍の中では人との関わり方が難しかったこともありますが、今からでも遅くはないそうです。子供たちの未来のために、できることを私たち大人が取り組んでいきませんか。

学校訪問研修　　　　　　１０月２３日(月)

富山県教育委員会や東部教育事務所、黒部市教育委員会等から先生方が来校され、生地小学校の子供や教師の教育活動に取り組む姿を参観されました。子供も教師も少し緊張していましたが、それぞれ工夫した授業が展開され、子供たちは真剣に学習していました。来校された先生方から褒めていただいた点は今後も継続し、指摘していただいた点については、今後の教師の取組に取り入れていきます。

学校保健委員会・PTA 教養講座　　　　　１０月２５日（水）

保健委員会の子供たちによる寸劇に、見ている子供たちは食い入るように（特に低学年が）見ていました。「メディアの使い過ぎはよくない」「イライラしたり乱暴な言葉を使うようになったりしてしまう」ということを子供たちに分かりやすく伝えてくれました。また、富山大学大学院　准教授　山田正明先生の講話では、医学的な見地からメディア使用と身体との関係等についてお話しくださいました。講話の詳細については、後日配布の保健だよりをご覧いただき、参考にしていただけたらと考えています。

授賞集会　　　　　　１０月２６日(木)

夏休み作品展や黒部市少年少女発明くふう展、黒部市小中学校児童生徒科学作品展覧会、歯・口の健康に関するポスターコンクール等で、賞を受けた子供たちの授賞集会をしました。ステージの上の子供たちは、少し恥ずかしそうにそして少し誇らしげに賞状を受け取っていました。また、受賞した子たちの頑張りをみんなが拍手で祝いました。生地小学校の子供たちは、校内だけでなく校外でも頑張っています。